

〔書評〕  
丸山顯徳著『日本靈異記説話の研究』

原 田 敦 子

説話文学研究が盛行する中、我国最初の仏教説話集という榮譽を担うはずの『日本靈異記』は、研究史の上では不遇であったかに見える。その原因は、内容たる説話が奈良朝もしくはそれ以前のものであつて、研究者の大部分が上代文学専攻者によつて占められていたにもかかわらず、作品の成立が平安初期であるため、文学史的には平安時代の作品とされてきたことであつた。結果は、

中古文学の分野では、学界時評や学界展望などに取り上げられること稀で、その含み持つ問題の重さに比し、上代文学の側からも中古文学の側からも、十全のアプローチがなされたとは言ひ難いように思う。無論、益田勝実氏の『説話文学と絵巻』をはじめとする秀れた業績の集積はあつた。しかし、それらが『日本靈異記』という一作品の枠を超えて、多くの研究者の手に迎え取られるといった状況は生れなかつたのである。このことは、とりもなおさず、延暦六（七八七）年の原撰から三十数年を経て最終的な完成をみたとされる、この作品の複雑な成立過程や、おそらくは何度かの屈折を経たであろう編者景戒の苦渋に満ちた人生、そして何

よりも、奈良朝から平安朝へという大きな歴史の転換点にあつて激動する社会など、変革期の所産であるこの作品が、それが故に有するさまざまな問題のしからしむるところでもあつたろう。

このような研究状況の下、説話研究に常に新生面を切り拓いてこられた丸山顯徳氏の論文が集大成されて一書にまとめられ、靈異記説話の研究に一つの確かな道筋が示されると共に、多くの研究者の利用の便に供されたことは、誠に慶賀にたえない。この骨太で力強い説話研究をめぐつてまき起ころであらう論議が、新しい靈異記研究の胎動となることを信じて疑わないものである。

本書のタイトルが『日本靈異記説話の研究』であることによつても知られるように、本書の研究目的は、所収説話の一つ一つを丹念に読み解くことによつて、個々の説話の形成過程を歴史的現実の中で解明してゆこうとする点にある。丸山氏の基本的立場は、個々の説話の研究によつて取り出された実質を最大公約的にまとめ上げることにあるとされるが、一つ一つの話の検討にあつては、従来の歴史的研究や仏教的研究に加えて、中国説話との比

較研究や民俗学的方法が多く駆使されて、当時の歴史社会の中で説話の伝承の実態が、具体的、時として刺激的に、生き生きと浮き彫りにされていく。その目くばりの広さと共に、博引旁証とどまるところを知らぬ論証過程は、読者に快い興奮と説話研究の醍醐味を覚えさせずにはおかないであろう。ここには、まぎれもなく、丸山氏独自の「靈異の世界・奇事の世界」があるのだ。

まずは目次によつて、本書の内容をたどつてみたい。

序 本書の方法と課題

第一篇 仏教と呪禁

第一章 小子部説話（上1縁）／第二章 狐の直説話（上2縁）／第三章 道場法師説話（上3縁）／第四章 狭屋寺説話（中11縁）／第五章 役小角説話（上28縁）／第六章 討債鬼

説話と食人鬼説話（中30縁・33縁）／第七章 隠身の聖説話

第二篇 冥界説話

第一章 冥界説話の分類と特色／第二章 檜磐嶋説話（中24縁）／第三章 奈良山枯骨報恩説話（上12縁）

第三篇 仏教と民間伝承

第一章 漂着霊木説話（上5縁）／第二章 蟹報恩説話（中8縁・12縁）／第三章 神身離脱説話（下24縁）

第四篇 編者景戒とその背景

第一章 景戒の出自とその背景（下38縁）

右からも明らかのように、著者がもっとも力点を置かれたのは、第一篇である。丸山氏は、多くの靈異記の研究者がそうであるよ

うに、益田勝実氏の「私度僧の文学」論に多大の影響を受けつつ、私度僧と言われる人々、あるいは『日本靈異記』の唱導の主体となつた人々の宗教的内容を呪禁という形でとらえられた。氏のこゝとを借りれば、「呪禁」とは、「様々な災難や厄災を除き、人々の幸せを招くために行う積極的な呪術的宗教行為であり、極めて現世利益的なもの」ということになるが、こうした観点からの説話の切り取り方は、景戒の説話編纂の方法、ひいては彼自身の思想的背景や、その出自などのとらえ方と、直ちに響き合うこと言うまでもない。丸山氏は、第四篇で景戒を紀伊国名草郡に長く居住したものと考へ、その紀伊国在任時代の宗教的基礎体験が、彼の宗教を、民衆の方を向いた呪術的かつ現世利益的なものに仕立て上げたとも述べられている。思えば、執筆年代からして、氏の靈異記研究のほゞ出発点に位置づけ得るこの論が、個々の説話の性格の究明を通して、より確信的なものとなつてゆくのが、第一篇だと言ふことができる。

このような著者の立場からすれば、仏教説話集の巻頭に置かれているにもかかわらず、非仏教的な説話であるとして、古来その存在意義が訝られてきた上巻第一・二縁も、前者は、小子部氏の軍事的性格ともかわつて、雄略天皇が雷という自然の驚異を小子部氏に捉えさせた呪禁の話、後者は、美濃地方に住んでいたと思われる狐の直なる呪術宗教者集団が、自らの有する超能力を継承し、社会的に認めさせるために、始祖を美しく描き上げた、いわゆる始祖伝承であると解け、いずれも『日本靈異記』の根底に

ある呪術的信仰を体現した話として、巻頭説話たる資格を充分に主張しうるることとなる。誠に明快な論であると言えよう。

従来、こうした問題は、多く日本の固有信仰と外来の異教との対立相克、もしくは仏教布教の方便としての固有信仰の利用、神話的世界の仏教的世界への包摂という観点から論じられてきた。

しかし、第一篇最終章で説かれた如き、仏教的行者と呪術者の習合した宗教家「隱身の聖」の思想的系譜に、行基とその集団、景戒に大きな影響を与えた沙弥鏡日、さらには景戒までが含まれるとすれば、仏教の伝来と定着をめぐる内なるものと外なるものとの対立緊張関係は、また別の相貌を呈することとなる。景戒や「隱身の聖」達が生きた世界には、日本の固有信仰や仏教の他に、現世利己的な呪術的宗教や、中国の民間道教、さらには神仙思想などが混淆して蠢動していたことが明かされてゆくからである。

従って、このような混沌たる世界に生成する説話に立ち向かう丸山氏の武器も、多様なものとならざるを得ない。

再度、巻頭の二話を引くならば、「小子部説話」において、小子部氏が天皇を警護する軍事的な色彩の濃い氏族であるとの主張に、藤原京跡発掘の木簡に「(表)小子部門衛士」、平城宮出土の木簡に「小子門」「小子部門」、『続日本紀』天平宝字八年十月十九日条に「小子門」とある点を押さえ、「狐の直説話」で、美濃国席田郡に広まっていた狐の憑霊による信仰を指摘するにあたって、「文徳天皇実録」中の「藤原高房卒伝」に着目されたのなどは、歴史的資料の利用が非常に有効であった例と言えようか。

ける雷神信仰の位相の違い、さらには、片や天皇と土着神、土着氏族との対立、片や寺院側による竜蛇神信仰の利用など、両話のよって立つ説話的基盤の違いについて、今後の丸山氏の説明を期待したいものである。

丸山氏のフィールドワークは広く沖繩・韓国・台湾にまで及び、その成果の一端が、本書に続いて刊行された『沖繩民間説話の研究』(一九九三・一〇 勉誠社)で明らかにされた他、本書第二篇「冥界説話」の考察にも大きく生かされている。現代に生きる我々には冥界の存在さえ信じ難いものとなっているが、韓国や台湾での巫俗調査で冥界の信仰が今に生きる姿を実感しつつ試みたとされる、冥界説話の体系化(第一章 冥界説話の分類と特色)は、『日本霊異記』の冥界説話のみならず、古代日本人の冥界観を考える上で、有効な視座を提供するものと思われる。第二章「檐響嶋説話」が右の体系に言う「被招請冥官型」の話であり、中国文化の影響を受けた沖繩の冥界説話と同じ話型のもが見出されるとの指摘も、フィールドワークを重んじられる丸山氏ならではの成果として、特筆に値しよう。続く第二章「奈良山枯骨報恩説話」では、枯骨報恩譚を冥界説話と位置づけられた上で、冥界説話の伝承者は冥界との交霊者であり、浮かばれぬ凶魔魂を鎮めることを職掌としていた人々がいたのではないかとの発想と、大和、山城の国境の死者霊の寄りつく境界領域の山としての奈良山の異境性を重ね合わせて、枯骨報恩説話の形成の背後に、行基集団や土師氏のような鎮魂集団の働きを想定されている。丸山氏

他方、丸山氏の力量は、民俗学的方法でも発揮される。第三章「道場法師説話」、第四章「狭屋寺説話」においては、日本の古代文献資料だけでは実証困難であるとして、現代の民俗にも言及しつつ、前者では、道場法師が雷神の申し子であり、竜蛇神の化身と考えられるところから、法師による元興寺鐘堂の鬼退治の話は、竜蛇神信仰の現世的効果の一つである、鬼に象徴される厄災の退散に当たり、水争いの話は、竜蛇神信仰のもう一つの効果である、水神として水の守護者となることに当たるとされつつ、鬼退治の話を、元来は元興寺の中で儀礼的に行われた鬼払い式の由来話が道場法師説話に組み込まれたのではないかと考えられ、また、後者でも、悔過の場面における悪霊追放というところに焦点を絞って「狭屋寺説話」を論じておられる。現在奈良県に住まわれる丸山氏は、奈良県各地で行われている古寺院の迎春儀礼である修二会や追儺の祭りから、説話の背景としての呪禁の問題を実感をもって受けとめることができたとも述べられているが、こうした着眼自体、従来の説話研究者の枠を超えた、氏の幅広い行動力とフィールドワークの実績によるものと、敬意を表したい。ただ、上巻第二縁「道場法師説話」では、雷神の寄胎した道場法師が悪霊(ここでは鬼)払いの呪師と、その際勧請された護法神としての両面性を有するとされるのに対し、上巻第一縁「小子部説話」では、雷は小子部氏によって捕えられるもの、すなわち呪禁の対象として考えられていることなど、「呪禁」なる観念を導入することによって、逆に浮かび上ってくる問題も多い。両話にお

の論証は、例によって奈良山と南山城の異常死の話から、この地域における行基集団の活動、さらには土師氏との関係へと多岐にわたったり、上巻第十二縁に関しては強い説得力を有する。ただ、枯骨報恩説話は、氏も言われる如く世界拡布型の民間説話であり、下巻第二十七縁の類話では、鬻體の救済者を市に交易に出かけた備後国草田郡大山里人として、霊異記の二話の原話に敦煌出土『搜神記』の侯光侯周兄弟の話、もしくはそれに近い文献の存在が想定されることからすれば、「奈良山枯骨報恩説話」の特殊に拘泥することには、いささかの危惧を覚えざるを得ない。本書では、第一篇第六章をはじめとする随所で中国の文献に記された説話との比較によって、霊異記説話の読みに新見が示されているし、第三篇では、民間伝承と説話の成立について、行届いた考察がめぐらされているのであるから、こうした視点を網羅した上で、「奈良山」の特殊を再度論じて頂ければと思う。

以上、紙幅の関係で、本書に挙げられた説話のすべてに触れることはできなかったが、全篇を通じて示された意欲のかつ斬新な手法と豊かな発想に多大の刺激を受けた。

時あたかも、「平安建都千二百年」の議論が喧しい。ともすれば王朝文化に眼を奪われがちな我々に、本書は、平安遷都前後の日本の精神風土について、貴重な示唆を与えてくれる。中古文学を専攻する一人としても、本書を得たことを心から喜ぶたい。

(一九九二・一二・一五発行、桜楓社、三七五ページ)  
(はらだ・あつこ 大阪成蹊女子短期大学教授)